

平成 2 年度  
埋蔵文化財緊急発掘調査概報

垂水遺跡  
吉志部遺跡

1991年3月

吹田市教育委員会

## 序

吹田市は大阪市に北接し、大阪都市圏への交通の利便に恵まれた住宅都市として急激な開発が進められてきました。しかし、このような急激な都市開発は、地下に埋蔵されている文化財の散逸を招くことになりました。

そのため、吹田市教育委員会では、文化庁及び大阪府教育委員会の御指導のもとに、昭和49年度以来、国庫補助事業として市内の埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本年度は垂水遺跡・吉志部遺跡の発掘調査を行いました。垂水遺跡では中世期の溝、古墳時代の杭列等の検出があり、吉志部遺跡では旧石器・縄文時代の石器等の遺物出土があり、いずれも本市の歴史を探る上で、重要な資料を得ることができました。

市教育委員会におきましては、このような調査成果を踏まえて遺跡の重要性の周知徹底につとめ、点から面へと広がりをもった埋蔵文化財の保護を実施していきたいと考えております。

今後も文化財保護については誠意努力を傾ける所存であります。市民の皆様方におかれましても、なお一層の深い御理解と御協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成3年3月

吹田市教育委員会

教育長 長光達郎

## 例　　言

1. 本書は平成2年度国庫補助事業として実施した、垂水遺跡、吉志部遺跡の緊急発掘調査をまとめたものである。
2. 発掘調査地点は次のとおりである。
  - 第1次 垂水遺跡 吹田市垂水町1丁目747-9
  - 第2次 吉志部遺跡 吹田市岸辺北1丁目157
3. 発掘資料の整理作業は吹田市青山台2丁目5番地、青山台小学校内文化財分室において実施した。
4. 本文は調査担当者、西本安秀、田中充徳及び文化財担当増田真木が分担して執筆した。各章の執筆分担は第1章 増田真木、第2章 田中充徳、第3章 西本安秀である。なお、第3章吉志部遺跡出土石器の実測及び精図については、園田学園女子大学 山口卓也氏に依頼した。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P(東京湾標準潮位)を示す。
6. 本文中の遺物番号は図番・挿図とも統一した。縮尺は、土器は1:3、石器は1:1に統一した。
7. 資料の整理にあたっては、林真理子、森小百合の参加を得た。
8. 発掘調査において茂薙富佐子・矢島一美・関本良太郎氏をはじめ、多くの方々の協力を得た。また、本書の作成にあたり、山口卓也氏の御指導、御教示を賜った。明記して謝意を表します。

---

### 発掘調査参加者名簿

調査主体　吹田市教育委員会 教育長 長光達郎  
調査指導　大阪府教育委員会文化財保護課 係長 石神怡・技師 佐久間貴士  
調査担当　吹田市教育委員会社会教育課 西本安秀・田中充徳  
調査補助員 北村有佐

## 目 次

第1章 平成2年度埋蔵文化財発掘調査の実機	1
第2章 垂水遺跡の発掘調査	4
第3章 吉志部遺跡の発掘調査	12

---

## 挿 図 目 次

第1図 発掘調査地点	3
第2図 垂水遺跡調査地周辺図	5
第3図 トレンチ配置図	6
第4図 調査トレンチ土層断面図	7
第5図 溝平面図	8
第6図 杖列検出状況	9
第7図 垂水遺跡出土土器実測図	10
第8図 吉志部遺跡調査地周辺図	13
第9図 調査区トレンチ配置図	14
第10図 調査区土層断面図1	15
第11図 調査区土層断面図2	17
第12図 吉志部遺跡出土石器実測図	21

## 図 版 目 次

- 図版 1 垂水遺跡航空写真・遠景
- 図版 2 垂水遺跡調査前近景・遺構検出状況(1)
- 図版 3 垂水遺跡遺構検出状況(2)
- 図版 4 垂水遺跡遺構検出状況(3)
- 図版 5 垂水遺跡遺構検出状況(4)
- 図版 6 垂水遺跡調査状況(1)
- 図版 7 垂水遺跡調査状況(2)
- 図版 8 吉志部遺跡調査前景観・T 1
- 図版 9 吉志部遺跡 T 2
- 図版10 吉志部遺跡 T 3・T 4
- 図版11 吉志部遺跡 T 5
- 図版12 吉志部遺跡 T 6・T 7
- 図版13 吉志部遺跡 T 11・T 12
- 図版14 吉志部遺跡出土石器

## 第1章 平成2年度埋蔵文化財発掘調査の契機

吹田市では昭和49年度以来、文化庁及び大阪府教育委員会の指導のもとに、埋蔵文化財包蔵地における小規模な開発工事に対して国庫補助事業として緊急発掘調査を実施してきた。

昭和51年度からは特に開発の進行の著しい垂水町3丁目一帯に所在する垂水南遺跡を中心とした発掘調査を継続し、遺跡の範囲や包蔵状況の確認等に大きな成果をあげた。さらに、昭和55年度からは市内各所での開発行為の増大に対応するために市内の遺跡全般に対して事業を拡大して大きな成果をあげており、最近では吉志部瓦窯跡に伴う工房跡の確認や、新規発見の53号須恵器窯跡等の調査がある。

平成2年度は垂水遺跡、吉志部遺跡の2遺跡に対して調査を実施した。

垂水遺跡は垂水町1丁目から円山町にかけての東西600m、南北400mの範囲に展開する。昭和初期に住宅開発に伴って弥生土器の出土が確認され、遺跡の存在が明らかとなったが、昭和30年すぎから民間の総合グラウンドの建設にともなって遺跡の西半分が大きく削平され、遺跡の大半は実態を明らかにされないまま壊滅的な破壊を受けたものと考えられる。その後、遺跡の中で、唯一その旧状を残していた垂水神社境内地において、垂水遺跡に対する初の本格的な発掘調査が昭和48年から51年にかけて関西大学考古学研究室と吹田市史編纂室、吹田市教育委員会によって実施された。調査では弥生時代後期の住居址4棟、掘立柱建物跡、焼土坑、土塙墓等を検出するとともに、後期を主とする前期から後期にかけての多量の弥生土器が出土し、垂水遺跡は千里丘陵の東南端に位置する弥生時代の高地性集落として大阪湾岸に展開する遺跡群の中で重要な位置を占めることが明らかにされた。また、弥生時代以外にも室町時代を中心とする中世の土塙墓、小祠跡、竈跡等を検出しておらず、歴史時代にも継続する複合遺跡であることが確認された。

この調査以後、円山町における住宅の建て替え等に伴う試掘調査や立会が市教育委員会によって実施されたが、明確な遺構や遺物の出土は認められず、遺跡は垂水神社の境内地である遺跡の南端部分のみに旧状を残すだけと考られた。

しかし、昭和55年から56年にかけて実施された垂水神社東方の丘陵裾部分の寮建設にともなう事前調査において溝、土坑、柱穴等の遺構を検出するとともに、弥生時代から室町時代にかけての遺物を確認し、垂水遺跡の丘陵下における新たな展開を明らかにし、丘陵下一帯での調査の必要性が認識された。

そして、昭和62年度から平成元年度にかけて丘陵南辺の平坦部において主に個人住宅の建設に伴い、丘陵下での垂水遺跡の調査を4次にわたって実施し、現地表下1.5~2.5m前後で条里地割の展開方位に一致する中世の溝を検出し、その下層2.5~3.5m前後において第IV様式を主とする弥生時代の遺物包含層を確認した。平成元年度には小規模な調査ではあったが、初めて

弥生時代の遺構として溝1条を検出した。

平成2年度は垂水町1丁目747-9において個人住宅の建て替えが計画されたが、これまでの調査地点の近接地であることから、遺構、遺物の存在が予想され、調査を実施した。

吉志部遺跡は吹田市岸部北1丁目302、303番地を中心とし、現在の大阪府立吹田高等学校の北側一帯の標高20~30mの千里丘陵が沖積平野に向かって傾斜する緩やかな斜面に立地する旧石器時代の遺跡である。地形の現状は周囲から迫る住宅化の波に押されて、旧来の地形を残すのは僅かに水田11面及び池2面、畠地2面を残す3~4段の棚田となっている。

土地所有者の関本良太郎氏によって昭和5年頃から石器等の石器の丹念な収集活動が開始され、約半世紀にわたって約300点の資料が収集されている。その間、収集された石器は研究者の目に触れることもなく、遺跡の発掘調査も行われなかつたが、昭和43年に遺跡の北北東で行われた吉志部瓦窯跡の発掘調査を実施していた大阪府教育委員会の調査団に収集された石器の一部が提示され、その中に有舌尖頭器やナイフ形石器が確認されたことから、吉志部遺跡が府下でも有数の旧石器時代の遺跡として注目された。

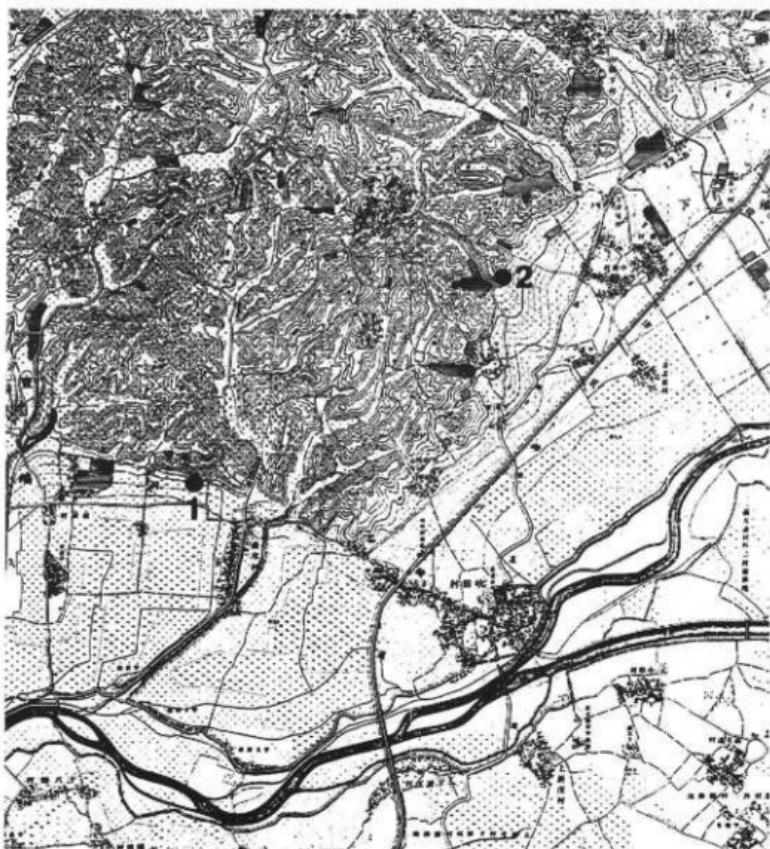
その後、吉志部遺跡の収集資料は昭和56年に刊行された吹田市史第8巻(考古編)にまとめられたが、その内容は旧石器時代の資料が、ナイフ形石器、有舌尖頭器等計50点、縄文時代の資料が石器等計78点が報告された。ナイフ形石器は高槻市塚原、同津之江南遺跡C地点等の資料と対応し、小型化、切出形化が進んでおり、国府期以降のものと評価され、剥片剝離技法、組成等は瀬戸内中央部の様相とは異なることが指摘されている。

このように吉志部遺跡の資料の研究が進む一方で、遺跡周辺における宅地化が着々と進み、旧来の地形を残しているのは関本氏の所有地のみといふ状況になっている。遺物収集の状況から考えて、遺物は水田耕作中の表面採集、あるいは用水池の泥上げの際の収集と考えられ、比較的上層からの出土品と考えられる。

遺跡周辺は学校建設や宅地開発が急速に進むことから大きく景観が変貌しており、遺跡保存の立場からは早急な遺跡範囲の確認と、遺物包蔵状況把握が必要となってきた。そして、昭和50年には住宅建設とともに発掘が行われ、中・近世の水田の開発状況を確認するとともに、弥生時代中期の土器を検出したが、旧石器、縄文時代の所見については得られなかつた。昭和55、56年度には関本氏の協力を得て、水田部分での範囲確認及び遺物包蔵状況の確認のための調査を実施した。調査ではサヌカイト剥片計4点を確認したことから遺物の分布範囲のある程度の推定は可能となり、いずれも原位置からは遊離した状況であることから遺跡の実態の把握までは至らなかつたが、大阪府下の旧石器時代に遺跡の中でも吉志部遺跡は重要な意義をもち、今後も吉志部遺跡への対処がきわめて重要なものであることを示した。

その後は吉志部遺跡に対しての調査は行われなかつたが、平成2年に関本氏から水田東南端部分の開発計画がもたされた。当該部分は昭和55、56年度の調査では遺物は出土していないが、小規模なトレンチ調査であることから断定はできず、さらに遺跡の性格を考慮すると、より慎重に対処することが必要であると判断された。また、調査状況から比較的表層からも石

器の検出される可能性が高いことから、小規模な開発においても遺跡の受けける影響は重大であり、今回包蔵状況の確認のための調査を実施した。



第1図 発掘調査地点 (1:40000)

1. 垂水遺跡 2. 吉志部遺跡

## 第2章 垂水遺跡の発掘調査

### 1. 位置と環境

垂水遺跡は、吹田市垂水町1丁目および円山町一帯に展開する、旧石器・弥生～中世期の複合遺跡である。遺跡の所在する千里丘陵は、前期洪積世期に形成された隆起台地である。豊中市島熊山付近を最高所とし、西に高く、東になだらかな地形となるが、長年にわたる侵食作用で深く複雑に曲折した開析谷を形成する。垂水遺跡は、こういった開析谷のうち、旧下新田村（現在の千里山西付近）東方から南下する支尾根最南端にあり、急峻な崖となって平野部に接する地点に位置する。この崖は縄文時代に起こった気候の温暖化のため、丘陵直下にまで海水が進入し、その侵食作用によって形成された海蝕崖で、丘陵地と平野部との間に約50mほどの比高差が認められる。そして、東方には吹田砂堆、南方から西に向かって神崎川や、糸田川等の千里丘陵から流れ出る小河川の沖積作用によって形成された低湿地が広がっているのであり、現在は標高T.P.55m前後の丘陵部と眼下に広がる標高T.P.約4～5mの平野部の両方に跨がって遺跡の分布が認められる。

垂水遺跡では、丘陵東部の吉志部遺跡とともに、後期旧石器時代の遺物が出土するが、集落等の遺構の存在が確認されるのは弥生時代になってからである。弥生時代になると、垂水遺跡周辺では、南方に垂水南遺跡・五反島遺跡の両遺跡が展開し、さらに神崎川の対岸には十八条遺跡・崇禪寺遺跡の存在が知られている。また西方には藏人遺跡さらに勝部遺跡・田能遺跡等多くの弥生時代集落遺跡が所在する他、東へ眼を転ずると、吹田砂堆上には高浜遺跡・都呂須遺跡が、丘陵上には片山公園遺跡・新芦屋遺跡・山田銅鐸出土地などと分布しており、遺跡の増加をみる。しかし、市内弥生時代遺跡においては、発掘調査によって遺構の存在が明確になったのは垂水遺跡のみで、その他の多くの遺跡については、その実態は不明なままであり、今後の調査の進展に期待するところが大きい。

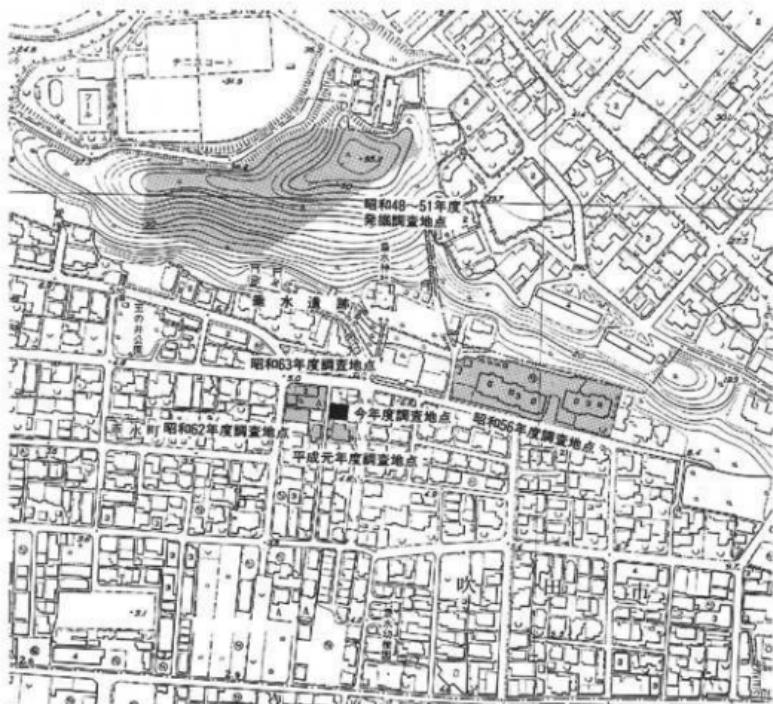
古墳時代になると、垂水南・五反島・藏人遺跡のその後の継続・発展に比べ、弥生時代中期から後期にかけて相当大きな集落を形成していたと推定される垂水遺跡は遺構・遺物ともに減少し、明らかに衰退する。集落の中心部が沖積作用による海岸線の後退とともに、丘陵と丘陵間際の平地から、南方に展開する垂水南遺跡等一帯に移動したためではないかと考えられている。これはこれらの遺跡群の立地と関わりが深く、対岸には上町台地とその先端部に伸びる天溝砂堆が間近に迫り、大阪湾と河内潟を繋ぐ交通の要路としての役割をこれらの集落が担っていたことによるものであり、当地一帯に展開する集落の特殊性を示すものである。

奈良時代以降は、平安時代中期成立の『和名類聚鈔』の記載から豊嶋郡大明郷の一部ではないかとされてはいるが、文献的にも考古学的にも、当時の集落形成に関する資料に乏しい。こ

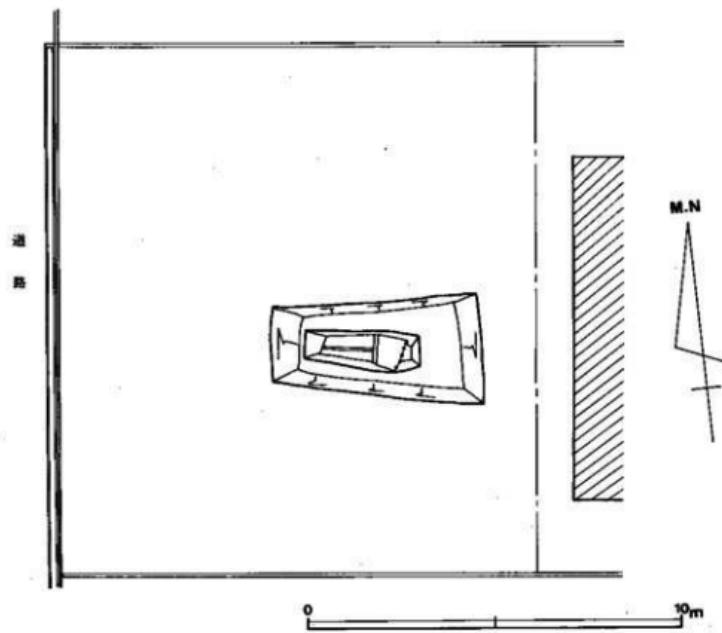
れに対し、舒明朝から孝徳朝にかけての有馬温泉への行幸や『行基年譜』「天平13年記」記載の垂水布施屋の存在にみられるように、貴族や租税等の官物の輸送に携わった人々の往来などが頻繁に行われていた様子が伺える。さらにそれまで淀川とは別水系であった三国川（現在の神崎川）が平安時代初期に開削され、三国川から淀川へ直接通上することができるようになった。これによって高浜津等の河岸の港津の発達が促された。また、春日社領垂水西牧・東寺領垂水莊等のように、摂関家や京都・南都の有力寺院領の莊園が当地一帯に数多く点在するのも、交通路上の要所としての位置づけを物語るものと言えよう。

## 2. 調査の経過

今回の発掘調査は、個人住宅建替工事に伴う事前調査として、吹田市垂水町1丁目747-9を対象に実施した。調査地は、垂水遺跡包蔵地の南端T.P.4.0～5.0mの住宅地内に位置する。今回の調査では垂水遺跡における遺構・遺物の包蔵状況を確認するため、1月21日に工事予定



第2図 垂水遺跡調査地周辺図(1:4000)



第3図 トレンチ配置図

地内に  $2.5 \times 6$  mの調査区を設定し、現代盛土層・旧耕土層等については重機による機械掘削を行い、それ以下の層については人力による分層発掘を行った。その結果、中世および古墳時代の遺構面各1面と弥生時代等遺物包含層を検出した。そして、これらの遺構については慎重に調査を進め、写真撮影、平面図・土層断面図等の記録作成などの作業を行ったのち、調査区を埋め戻し、1月24日に調査を終了した。

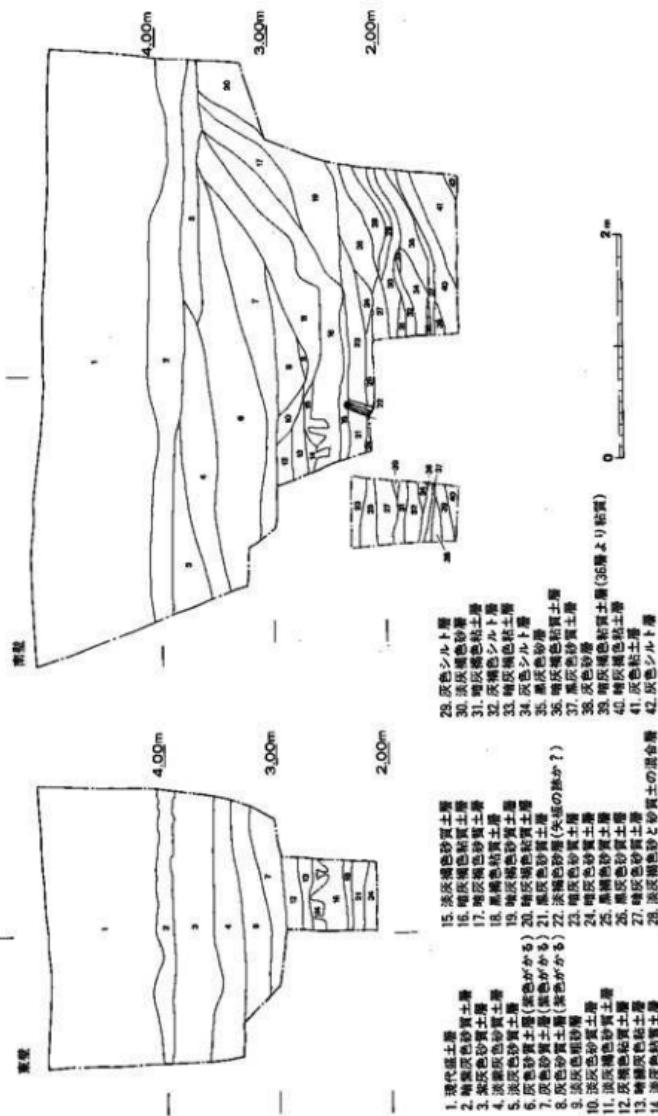
### 3. 基本土層序

今回の調査地における基本土層序は地表下厚さ約100cmのⅠ層・現代盛土層(1)、Ⅱ層・旧耕土層(2)以下次のように大別される。

Ⅲ層(3~7)は、砂質土を主とする堆積土である。浅いところで約15cm、深いところでは約95cmの厚さとなり、西から東に向かって流れ込んだ堆積状況を示す。近世以降の陶磁器を包含する。

IV層(12)は、厚さ約10cmの灰褐色粘質土層で上面から南北方向の溝とこれと併走する落ち込み状遺構を検出した。溝内の灰色粗砂層に土師器皿等を包含する。

第4図 調査トレインチ土壌断面図



V層(16)は、約24cm前後の層厚を持つ。検出した約60cm四方の部分から足跡が多数発見された。

VI層(21・23・26)は、主に黒灰色等の砂質土による堆積層で、標高T.P.約2.4mにある上面からは弥生土器・土師器の細片の出土とともに、杭列が検出された。

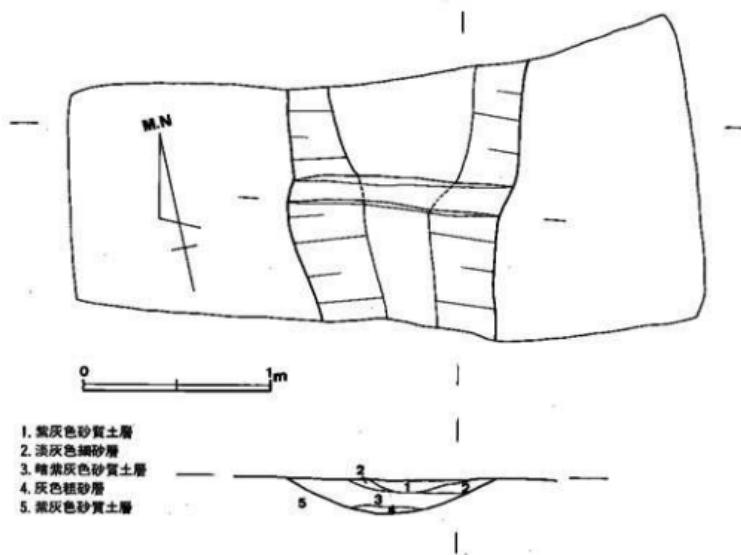
VII層(24・27~37)は、砂層・粘土層等が斜方向に複雑に堆積する。河川等の流水による堆積ではないかと考えられる。

VIII層(39・40)は、暗灰褐色粘土層による堆積層で、上層と同様に斜方向に堆積する。いずれも細片であるが、弥生時代の遺物を包含する。

IX層(41)は、層厚約20cmを測る粘土層であり、上層と同様に斜方向に堆積する。なお、この下層には灰色シルト層が検出されたが、(41)とともに遺構・遺物とも全く検出されなかつた。

#### 4. 遺構

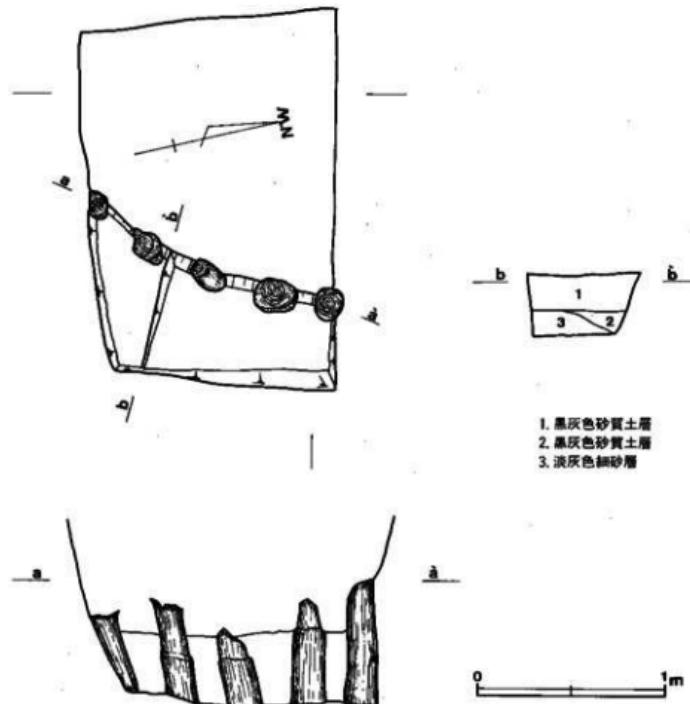
今回の調査では、南北方向の溝と杭列を検出した。



第5図 溝 平面図

a. 溝

調査区内の中央付近には、灰褐色粘質土層等をベースとして、南北方向N-11°-Eに走行する溝が検出された。溝幅約92~125cm、深さ約19cmを測り、溝内には紫灰色砂質土層、灰色粗砂層等数層の複雑な堆積がみられた。溝内最下層からは、弥生土器及び中世期の土師器皿細片を多量に出土した。南北方向の比高差は認められなかったが、西側には急激な上昇がみられ、比高差約68cm・斜角33°の傾斜地となっていた。溝の西岸から直接上昇していることから同時期に機能していたものと考えられる。また溝については、大別して2層の堆積が認められ



第6図 杭列検出状況

るが、下層は掘削後比較的短期間の埋没であり、上層に流水の痕跡が見られることから、これが溝として機能していたと考えられる。なお、溝埋土最下層の灰色粗砂層からは土師器皿細片が多く出土したが、その反面、瓦器の出土が全く見られなかった。

### b. 杭 列

暗灰色砂質土層をベースとして、調査区東側を東北から南西方向N-30°-Eに、わずかに曲線を描きながら続く杭列が一列検出された。約1.5mの間に5本の杭が検出できた。概ね杭の径は上端で10~14cm・下端で16~18cm、検出部分の杭の長さは42~68cmを測るものであった。出土遺物としては、遺構面上から弥生土器・布留式土器細片の出土がみられたが、古式須恵器の出土は全く見られなかった。

## 5. 遺 物

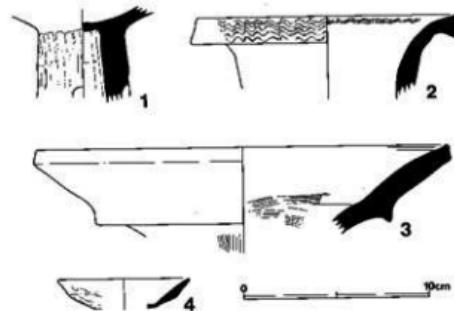
今回の調査では、弥生土器・布留式土器・中世の土師器・木製品等の細片が収納箱1箱に収納できる程度の出土量であった。そのため、図化可能な資料も弥生土器等4点と限られたものであった。

まず、弥生土器高杯(1)は脚部の細片で、灰色粘土層上面(VII層)から出土したものである。基部径4.6cm、残存高4.5cmを測る。杯部と脚部の接続部分には、円板充填法が行われていた他、脚柱部は直線的に下方に伸びる円筒状脚柱である。次に、弥生土器壺(2)は暗灰褐色粘質土層(VI層)から出土したもので、外反する口縁部に垂下した口縁端部をもち、端部外面及び口縁部内面に櫛描波状文を施す。口径14.0cm、残存高4.6cmを測る。

そして、土師器壺(3)はいわゆる二重口縁壺で、頸部は口縁部に向かって大きく外反する。口径22.2cm、残存高4.6cmを測り、器表面にはハケ目調整後、化粧土を施す。黒灰色砂質土層(VI層)からの出土である。土師器皿(4)は灰褐色粘質土層(IV層)から出土したもので、口径7.0cm、器高1.6cmを測り、内部と外部上端にヨコナデを施す。

## 6. 結 語

垂水遺跡の丘陵下部での発掘調査は、調査面積が数十m<sup>2</sup>以下であるため、検出された遺構の性質について分かりにくい現状にある。今回の調査においても小規模であるため、その性格を推察することは非常に困難な問題ではあるが、ここでは今回の調査成果について簡単ではあるが記したい。



第7図 垂水遺跡出土土器実測図

まず弥生時代については、明確な遺構面を検出することはできなかったが、南西に高く北東に低い斜方向の堆積が認められた。これまでの発掘調査によって検出された弥生時代遺物包含層は水平方向に堆積したものであり、全く異なる堆積状況を示していることから、河川・溝あるいは丘陵地から延びる谷地形が考えられる。なお、本調査地の南東側で実施された平成元年度第1期調査からは弥生時代の比較的大きな溝が発見されており、この溝との関連性が注目できる。

古墳時代については、方位N-30°-Eを測る、南北方向の杭列を検出したが、昭和63年度発掘調査で検出した古墳時代のものと考えられる溝9と若干の差異はあるものの、方位・標高ともに近似した数値を示しており、ほぼ同時期に機能していた可能性が考えられる。出土遺物から、この杭列については古墳時代前期の所産ではないかと推察される。しかし、当遺跡南方に展開する、古墳時代前期の集落を主体とする垂水南遺跡では、磁北より西へ30度振る方向性を持っており、今回の調査例は垂水南遺跡とは異なる方向であった。地形上の制約を受けながらも古墳時代の遺構が広範囲に展開していた可能性を示唆するものではないかと想定されるが、わずかな面積を検出したにすぎず、今後の調査成果に期待したい。

中世期については、南北方向の溝とこれに併走する急傾斜の落ち込みを検出したが、溝の下層埋土と斜面を形成する土砂が連続した堆積状況を示すことから、同時に機能していたものと判断される。また、方位も南北方向N-11°-Eとこれまでに垂水遺跡で発掘された溝群及び畦畔にほぼ当てはまるところから、当地一帯において広く実施されていたと考えられる条里制区割に規制された遺構であることが推察される。垂水遺跡では、ここ数年の調査によって、中世においては丘陵地の間際にまで農地が展開する状況が明確になってきたが、今回の調査および平成元年度の調査によって検出された傾斜面は特異な例であり、河川とこれに付随する堤防のような施設が存在するのではないかと考えられる。なお、出土遺物等の検討から、この溝については室町時代の所産ではないかと考えられる。

今回の調査ではこれまでと違った所見も得られたが、部分的な調査による成果であるため推定の域を越えないものであり、その実像については今後の調査成果に期待したい。

註) 末尾至行他編『吹田市史第1巻』吹田市史編纂委員会 1990年

網干善教編『吹田市史第8巻』吹田市史編纂委員会 1981年

吹田市教育委員会『昭和56年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』1981年

吹田市教育委員会『昭和63年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』1988年

吹田市教育委員会『平成元年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』1989年

## 第3章 吉志部遺跡の発掘調査

### 1. 位置と環境

吹田市は大阪府の北部に位置する。地質的には、千里丘陵とよばれる大阪層群と南部の安威川・神崎川沿岸の沖積層とからなっている。

千里丘陵は、鮮新世後期から洪積世前期にかけて、この地に存在した古大阪湖・古大阪湾に厚く堆積した疊・砂・粘土を主とする地層が隆起した丘陵で、層相は上・下2層に分けられる。上部は海成粘土層が多く含まれ、下部は水成層が主体で、その境界にはアズキ火山灰層と呼ばれる鍵層が存在する。東西10km、南北8kmの広がりをもち、吹田市の北半部、豊中市の東半部、箕面市、茨木市的一部を包括している。丘陵の隆起運動の際、西側から突き上げられたため北西側が高く、東側・南側は低くなっている。最高地点は豊中市島熊山の北方で標高133.8mを測り、吹田市域では標高50~80mのなだらかな起伏を繰り返す丘陵となっている。

市の南半部に展開する沖積平野は大阪平野の一部であり、大阪平野は千里丘陵と上町台地を結ぶラインを境として、東側の河内平野・北摂平野、南側の和泉平野、西北側の西摂平野に分けられる。

大阪平野の沖積層は難波累層とよばれ、洪積世末から沖積世にかけて堆積した層である。ウルム氷期の最盛期（25,000年前～17,000年前）に、海面の低下は極頂に達し、現在よりも約150cm下がった。現在みられる大阪湾は完全に陸地化して盆地と谷地形となり、当時の海岸線は紀伊水道のはるか沖合にあったと推定されている。この後しだいに気候は温暖化し、縄文早期～前期にかけて海進は頂点に達する。この際、千里丘陵の南端部、垂水町～円山町においては海進によって侵食された海蝕崖となり、ここより東流する沿岸流によって運ばれた砂が千里丘陵と上町台地との間の澗口付近に堆積して吹田砂堆が形成された。この後、大阪平野は次第に陸化していく、河内湾I・IIの時代、河内潟の時代、河内湖I・IIの時代を経て現在に至った。

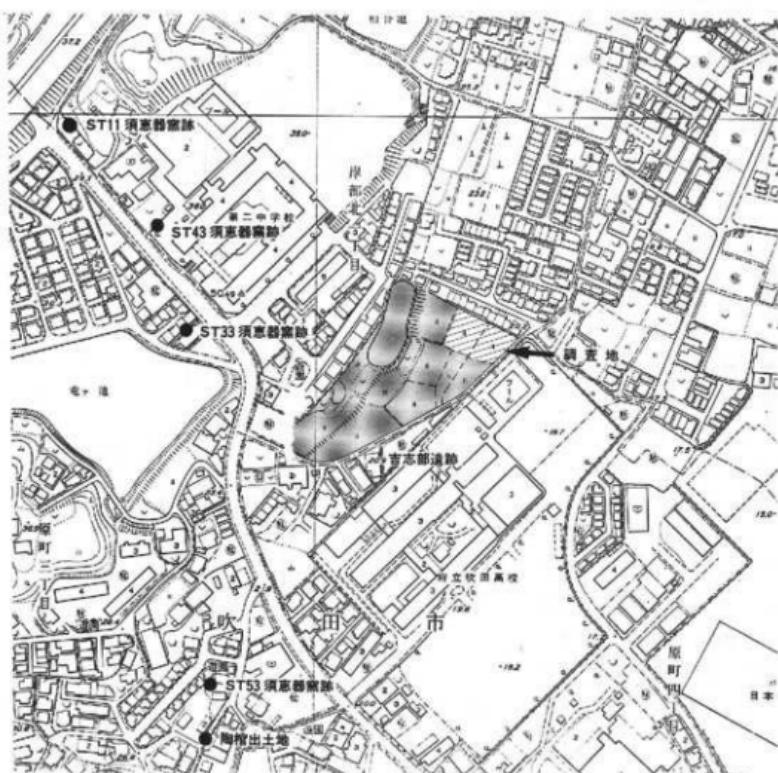
吉志部遺跡は、上記のような自然環境のもとで千里丘陵の東南端、標高30～20mの南東にゆるやかに傾斜する地点に立地する。その分布範囲は、吹田市岸部北1丁目302、303番地を中心として東西約160m、南北約100mを測り、現況は水田・池・畠地となっている。遺跡の周辺は既に宅地化がなされ、旧景観を認めることができない。当遺跡では、これまで収集活動及び昭和55・56年度に実施された調査等により、ナイフ形石器、錐状石器、楔形石器、搔器、削器、剝片、石核などの旧石器と、縄文時代草創期の有舌尖頭器、縄文時代の石鐵、石錐等約300点の石器が発見されている。

旧石器時代は大阪湾は陸化しており、千里丘陵縁辺部は絶好の生活環境になっていたと思わ

れる。本市域では他に垂水遺跡でナイフ形石器、石核等約10点が確認されており、吉志部遺跡と同時期頃のものである。

縄文時代になると気候の温暖化に伴って海平面が上昇し、これに伴って生活環境も変化を余儀なくされたと思われる。縄文時代の遺跡は、なだらかな起伏と浅い開析谷のある縁辺部に立地することが多く、吉志部遺跡の他、豊中市野畠遺跡が知られている。野畠遺跡では、後期の土器、石鐵、錐状石器等が出土している。吉志部遺跡のように石器類の散布のみ認められる小遺跡は、狩猟活動の作業場的な性格が推定されている。この他、七尾瓦窯跡下層構造から晩期の船橋式土器、豊嶽郡条里東限界遺跡では後期の土器の出土があり、最近では護国寺下層で中期の船元式土器の出土があった。

弥生時代になると市内でも急激に遺跡が増加し、垂水遺跡では少量の前期土器が出土してい



第8図 吉志郎遺跡調査地周辺図(1:4000)

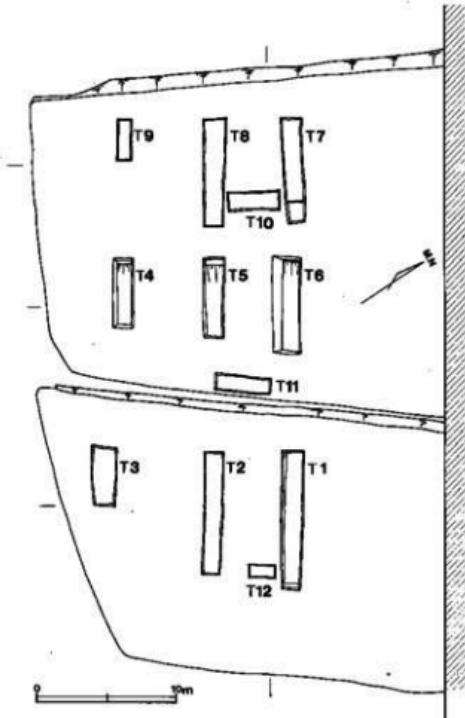
るが、最盛期を迎えるのは中期末～後期で、以後衰退する。遺物が出土するのみで詳細は明らかでないが、中期の都呂須遺跡、後期の垂水南遺跡・蔵人遺跡、中・後期の五反島遺跡の他、吉志部遺跡・新芦屋遺跡でも遺物の出土が確認されている。このうち、垂水南遺跡、蔵人遺跡、五反島遺跡は古墳時代まで継続しており、垂水遺跡との関連性が今後の課題となっている。

古墳時代中期以降は千里丘陵では須恵器生産が始まり、奈良時代には聖武朝難波宮造営瓦窯である七尾瓦窯跡、平安時代初めには平安宮造営瓦窯である吉志部瓦窯跡が成立し、窯業生産地としての性格が顕著に認められる。このことは、千里丘陵が良質な粘土と薪などの燃料に恵まれ、窯業に適したという自然的要因も大きいと言わざるをえない。

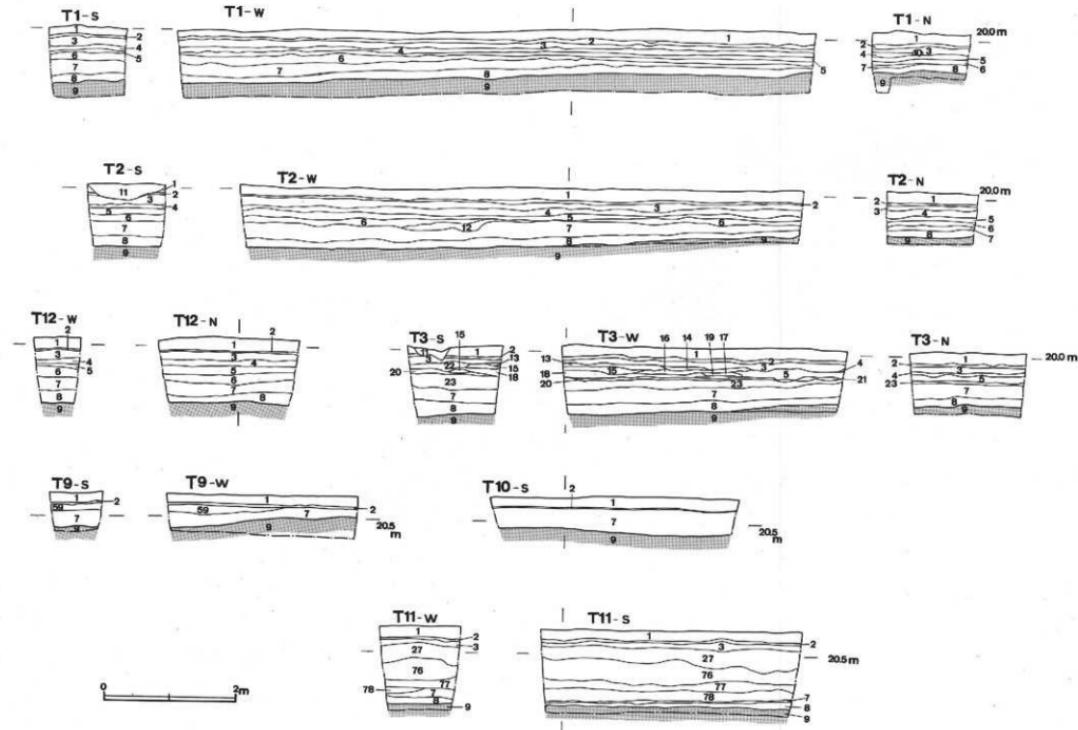
## 2. 調査の経過

発掘調査は岸部北1丁目157番地について平成3年1月24日～2月20日にかけて実施した。調査対象地は現在上下二段の水田面であり、おのおのの標高は、21.0m、20.0mである。今回の調査は、昭和55・56年度に行なわれた発掘調査の目標を踏襲し、遺構・遺物の包蔵状況を確認することと、旧石器・縄文時代の文化層を層位的に把握すること、遺物の原位置を確認し、良好な包蔵地点を検出することの3点を目標として実施した。そこで、丘陵の傾斜に合わせてトレンチを上段に8か所、下段に4か所、計12か所のトレンチを設定した。調査面積は104m<sup>2</sup>である。表土、床土等現代水田層は機械により掘削し、以下は断面観察を行いながら、人力により慎重に掘り下げを行った。

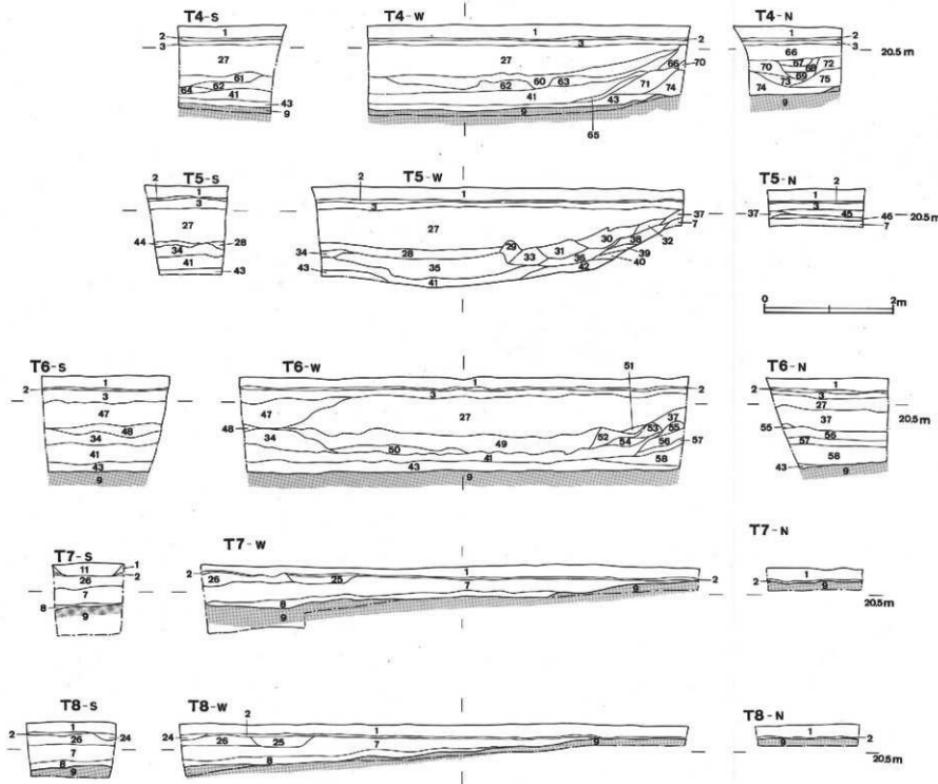
まず、最初に着手した下段



第9図 調査区トレンチ配置図



第10図 調査区土壌断面図1



第11区 調査区土層断面図 2

### 調査トレンチ土層名一覧

1. 黒灰色土(現代水田耕作土)	I層	27. 灰色・黄褐色土混合層	53. 増灰色粘質土(砂混じり)
2. 黄褐色粘質土(現代水田床土)	II層	28. 白灰褐色粘土	54. 白灰色砂質土(軟質)
3. 淡灰褐色土	III層	29. 黄灰色粘土(砂混じり)	55. 黑灰色粘質土
4. 増灰褐色土	IV層	30. 増灰色粘土(砂混じり)	56. 灰色粘土
5. 灰褐色土	V層	31. 黑灰色粘土	57. 灰色砂
6. 灰色粘質土	VI層	32. 増灰色砂質土	58. 白灰色粘土
7. 黄褐色粘土	VII層	33. 増灰色粘土・砂混合層	59. 黄褐色土
8. 灰色粘土	VIII層	34. 灰色粘土(軟質)	60. 黄色粘土・灰土混合層
9. 赤褐色硬質土(地山)	IX層	35. 増灰色粘土(軟質)	61. 雜色土・白色土混合層
10. 増褐色粘質土		36. 淡灰色粘土(軟質)	62. 灰色粘土(黄色砂混じり)
11. 混乱層		37. 增灰色砂質土(軟質)	63. 白色砂
12. 増灰褐色粘質土(軟質)		38. 白灰褐色粘土	64. 増灰色粘土
13. 赤褐色粘質土		39. 淡灰色粘土	65. 灰白砂
14. 白灰色砂		40. 灰色砂(軟質)	66. 増褐色土(やや硬質)
15. 白灰色砂(赤褐色粘質土混じり)		41. 黑褐色粘土	67. 増灰色粘質土(やや硬質)
16. 淡赤褐色粘質土(白灰色砂混じり)		42. 白褐色粘土	68. 灰色土
17. 淡白色砂		43. 青灰色粘土	69. 増灰色砂質土
18. 橙褐色土		44. 黄色粘土	70. 淡灰褐色土(やや硬質)
19. 淡褐色土		45. 橙色砂質土	71. 黄褐色粘土(軟質)
20. 橙褐色粘質土		46. 淡白灰色砂質土	72. 灰褐色土(66%より多い)
21. 橙色砂質土(軟質)		47. 增褐色土(軟質)	73. 淡灰色砂質土
22. 淡暗灰色粘質土		48. 灰色土と黄色砂質土の混合層	74. 黄褐色粘土
23. 黄灰色粘質土		49. 黄褐色粘土(灰色粘土混じり)	75. 増灰褐色土
24. 増灰褐色土		50. 淡青灰色粘土	76. 増褐色砂質土
25. 増灰褐色粘質土(現代溝塗土)		51. 灰色砂質土と黄色砂質土の混合層	77. 灰色砂質土
26. 黄灰色粘質土(やや硬質)		52. 灰色粘質土(軟質)	78. 雜色土

のトレンチからは、いずれも中世期の土師器、須恵器、瓦器等の細片が少量出土し、また、T2のⅨ層からサヌカイト剝片が出土したが、明確な造構は認められなかった。上段のトレンチでは、南半部で溜池と思われる落込みを検出した。溜池の埋土内から縄文時代の石器が2点出土した。他に中世期の土師器、須恵器、瓦器等細片が出土した。上下段とも土層堆積状況を検討するため部分的に深掘を行った。これらについて図面、写真撮影等の記録を行った後、トレンチの埋め戻しを行い、2月20日に全ての作業を終了した。

### 3. 調査の成果

#### (1) トレンチ調査の成果

##### (T1・T2・T12)

調査区の下段に南北方向(T1・T2)、東西方向(T12)に設定したトレンチである。基本的な堆積状況は3トレンチとも同様である。I層 水田耕土、II層 水田床土(現代)以下 III層 淡灰褐色土、IV層 暗灰褐色土、V層 灰褐色土、VI層 灰色粘質土、VII層 黄褐色粘土、VIII層 灰色粘土、IX層 地山(赤褐色硬質土)という層序である。II層は、水田造成時の

盛土とみられ、近・現代遺物が検出された。VI層は、上面が標高約19.6mでほぼ平坦であり、水田耕作土層の可能性がある。中世期の遺物（須恵器、土師器、瓦器）が認められたが、細片で磨滅したものが大部分で、当地の開発に際して流れ込んだものと判断される。VII層ではT2において、サヌカイト剝片が1点検出されたのみで、これ以下では遺物は全く検出されなかつた。IX層は表面に亀甲状のひび割れが認められる地山層で、南側へゆるやかに傾斜していた。3トレンチとも、上記の層では遺構は検出されなかつた。

#### [T3]

T2の西側に設定したトレンチで、土層序は基本的にT1・T2と共通するが、トレンチ南半分では砂層の複雑な堆積があり、水田造成の際の盛土とみられる。遺構は認められず、遺物についても若干の中世期の遺物（土師器）細片が検出されたのみである。

#### [T4～T6・T11]

調査区上段の南側に、南北方向（T4～T6）、東西方向（T11）に設定したトレンチである。T4～T6では、現代水田造成時の盛土の下でトレンチ北端部から南側への落ち込みがあり、深さ1.1mにも達する。落ち込み内には、下層に軟弱な黒褐色粘土の堆積があり、上層は灰色・黄褐色土混合層による埋土が認められ、溜池とみられる。堆積土中に近・現代の遺物が混入しており、この時期の所産と判断される。これ以外には遺構は検出されなかつた。遺物については、T6の溜池埋土からサヌカイト削器・剝片が出土したほか、各トレンチの溜池埋土から少量の中・近世期の遺物が出土した。

#### [T7～T10]

調査区上段の北側に、南北方向（T7～T9）、東西方向（T10）に設定したトレンチである。層序は、I層 現代水田、II層 水田床土以下、VIII層 黄褐色粘土、VII層 灰色粘土、IX層 地山層で、地山層は南へゆるやかに傾斜していた。T7～T10の南側床土直下で、幅1m、深さ約10cmの浅い東西方向の溝を検出したが、近・現代の遺物を混入しているところから水田耕作に関わるものと判断される。T8のI層水田耕土直下の暗灰色土層で、有舌尖頭器1点が出土した。

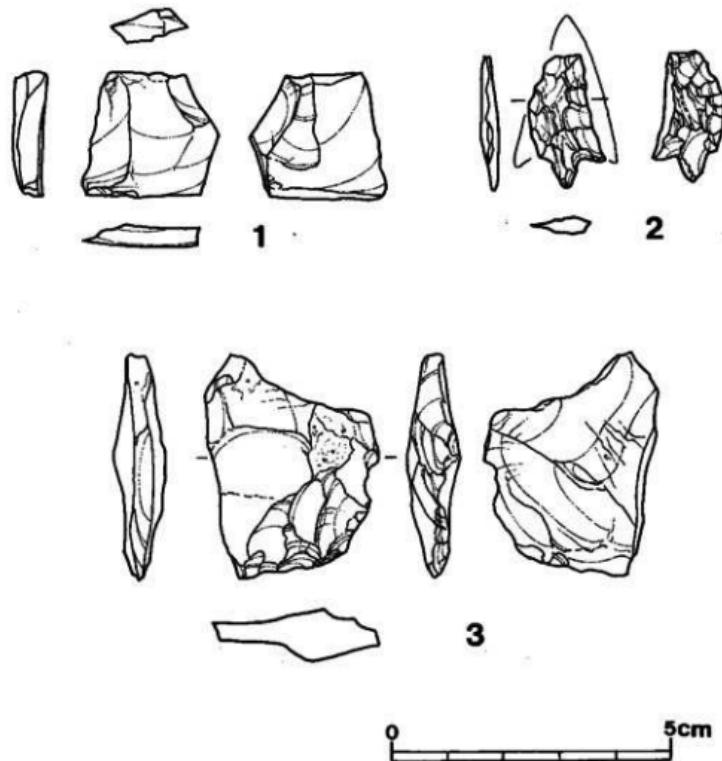
#### (2) 遺物

各トレンチからは、中世期の遺物（土師器、須恵器、瓦器）が少量検出されたが、細片で磨滅の著しいものが大部分である。石器については、新たに4点検出され、その内訳はサヌカイト剝片2点、有舌尖頭器1点、サヌカイト削器1点である。ここでは、これらの石器のうち、3点について記述する。

- (1) T2のVII層黄褐色粘土層から出土したサヌカイト剝片で、縦長剝片が折断されたものである。重さ3.8gを測る。風化が著しく、旧石器時代の遺物と判断される。
- (2) T8のI層現代水田耕土直下の暗灰色土から出土したサヌカイト製の小型有舌尖頭器である。先端部から右側縁辺部が欠損する。逆刺は身部にえぐり込むような形状で、左側は欠損している。身部の左側縁辺部に鋸歯状線が残る。重さ0.8gを測る。同様のものは、当遺跡の

採集資料にもみられ、I～III類に分類されたうち、III類に属する。新潟県小瀬ヶ沢遺跡出土有舌尖頭器に類例がある。縄文時代草創期の遺物と判断される。

- (3) T 6 の近・現代溜池埋土層から出土したサヌカイト製の削器である。大ぶりの不定形の剥片を使い、右下に加工痕が認められる。重さ10gを測る。風化が進んでいないので縄文時代の遺物と思われる。



第12図 吉志部遺跡出土石器実測図

#### 4. 結 語

本年度の調査では、近・現代の溜池を確認した以外、明確な遺構は認められなかった。遺物については、旧石器・縄文時代の石器と中世期の遺物が検出された。このうち中世期の遺物はローリングを受けた細片資料であり、上方からの流れ込みによるものであろう。昭和55・56年度の2次にわたり行われた調査所見からも、当地で中世期の遺構が展開する可能性は少ないと見える。ただ、当該期の遺物を多く含むVI層 灰色粘質土層は、調査区下段において顕著に認められ、フラットな面をなすところから中世期の水田層である可能性が指摘できる。そうすると、昭和50年に周辺地（吹田市小路290）において行われた発掘調査で確認された中・近世の水田開発の所見に引き続いて、当地における水田開発の一端を示す所見が得られたとも考えられよう。

次に石器については、新たに4点の石器資料の増加をみた。このうち3点は明らかに本来包含された層から遊離した状態で出土したもので、T 2 のVII層で出土したサヌカイト剣片も、原位置を保ったものとは言いがたい。従って、昭和55・56年度の調査以来目的としていた旧石器・縄文時代の文化層を層位的に把握するには至らず、今後に課題を残すこととなった。出土石器は旧石器・縄文時代のもので、旧石器剣片1点、有舌尖頭器1点、縄文時代削器1点、剣片1点であり、バラエティーに富んでいる。

吉志部遺跡出土土器については、既に秋枝芳氏、山口卓也氏によって検討がなされ、遺跡の内容の一端が明らかとなつた。これによると旧石器～縄文時代の時期のものがあること、旧石器についてはナイフ形石器の製作に瀬戸内技法は認められず、国府型期以後のものであること、國府型期に続く時期の高槻市津之江南遺跡C地点資料は大型のナイフ形石器を主体とするのに対し、吉志部遺跡は中・小型を主体としていることから後出であること、周辺の同時期頃の遺跡として垂水遺跡、高槻市塚原遺跡が認められるとした。さらに尖頭器については近畿地方では通常単独で採集されることが多いのに対し、吉志部遺跡ではこれまで8点も採集され、しかも形態のバリエーションが豊富であること、このうち、Ⅲ類に分類される小型で身部の両側縁が直線的で鋸歯状をなし、舌部が長くて逆刺が身部にえぐりこむタイプの有舌尖頭器は当遺跡が分布上の西限に位置づけられること、また、尖頭器の時期には、長野県柳又遺跡、愛媛県上黒岩遺跡で隆起線文土器の伴出があり、吉志部遺跡でも当時期の土器を共伴する可能性のあること等が指摘されている。

縄文時代の遺物では土器が発見されず、石器のみであり、その石器も石鐵が多く、他の器種が少ないと等の特徴があり、洪積台地の縁辺部に立地する環境からも判断して、縄文時代の吉志部遺跡の性格は、ハンティングサイト、またはキルサイトと想定されている。

以上のように評価されている当遺跡の石器の中で今回検出した資料は、これまで採集された資料及び、昭和55・56年度の発掘調査で検出された資料と比べて基本的に差異ではなく、同様の資料と位置づけられる。その中で単独の出土が多い有舌尖頭器がさらに1点検出されたことは

注目に値する。特に、小瀬ヶ沢遺跡に類例があるⅢ類が出土したこと、有舌尖頭器の型式分布、地域性について今後の課題となろう。また今回、時期相の異なる石器がまんべんなく出土したことは、やはり当地に純粹な遺物包含層または文化層が遺存していることを示唆するものといえないだろうか。この点については、今後詳細な調査を行なう必要性を示すものであり、周辺の宅地開発が急速に進む中で、未調査区に対する調査、保存の措置は緊急を要する課題であろう。

註) 秋枝 芳 「吹田市吉志部遺跡採集の石器について」『吹田の歴史』第2号 1974年

網干 善教編 『吹田市史』(第8巻別編) 1981年

藤原 学・山口卓也 「吉志部遺跡」『昭和55年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』  
1981年 吹田市教育委員会

山口卓也 「吉志部遺跡発掘調査」『昭和56年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

1982年 吹田市教育委員会



吉志部遺跡調査風景



垂水遺跡周辺航空写真

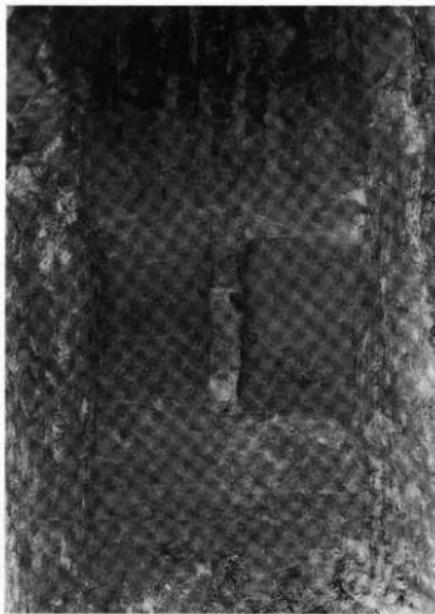


垂水遺跡遠景(南から)

図版二 垂水遺跡調査前近景・遺構検出状況  
(1)



▲調査前近景(南西から)



▲溝検出状況(西から)▶

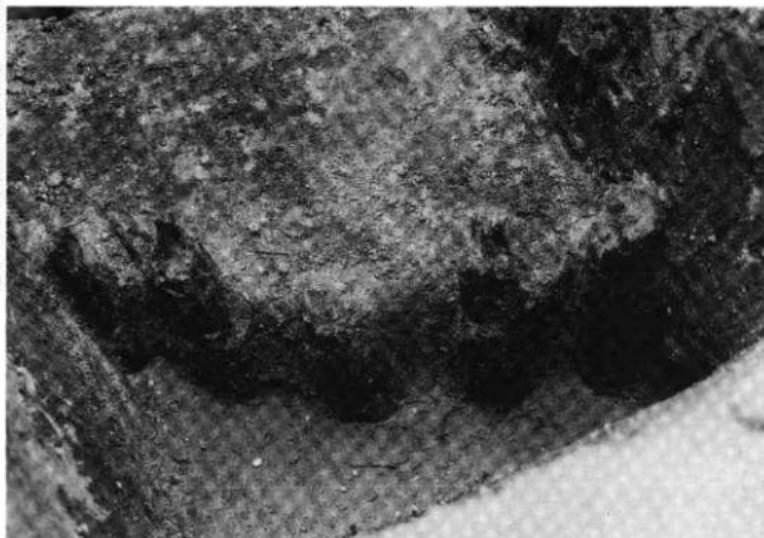


溝内堆積土層断面



杭列(西から)

図版四 垂水遺跡遺構検出状況(3)



▲杭列(東から)



杭列細部▶

圖版五 垂水遺跡遺構檢出狀況(4)



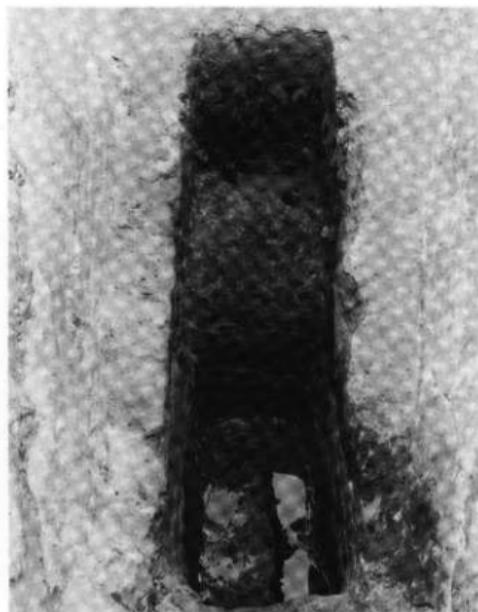
杭列細部▶



杭列細部

図版六

垂水遺跡調査状況(1)



最終検出状況(西から)▶



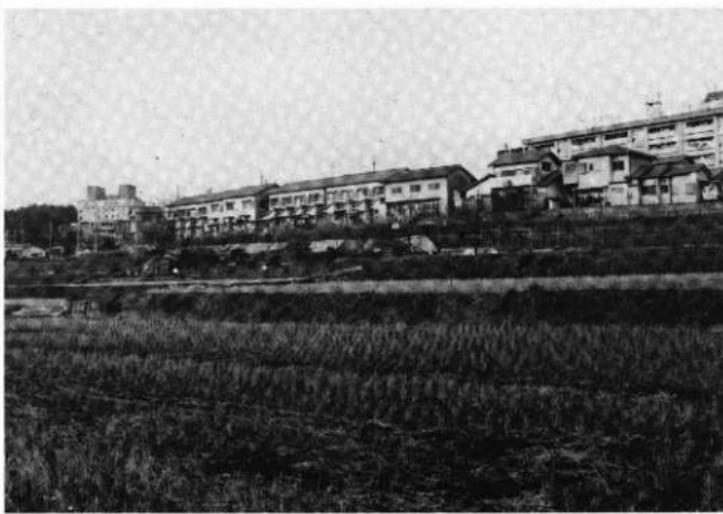
南壁断面



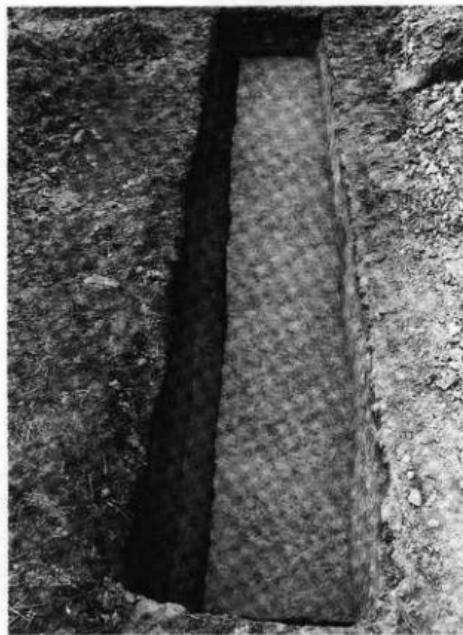
▲南壁断面下部



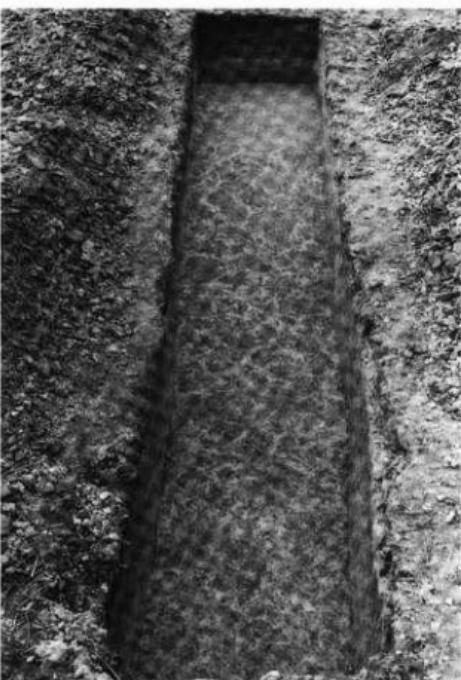
東壁断面▶



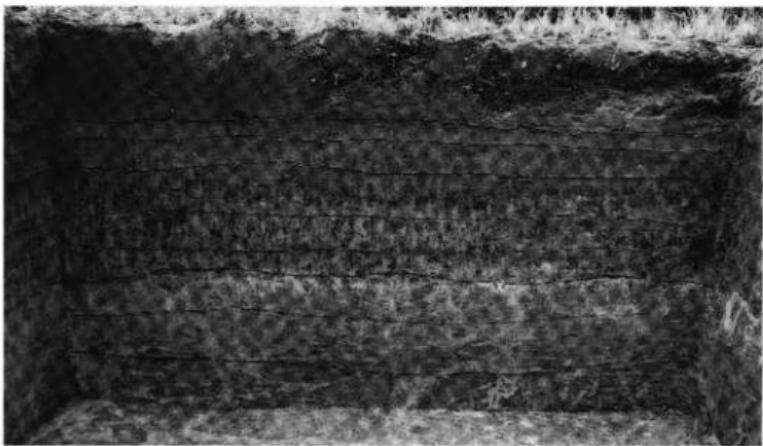
▲調査前近景(東から)



T1(南東から)▶

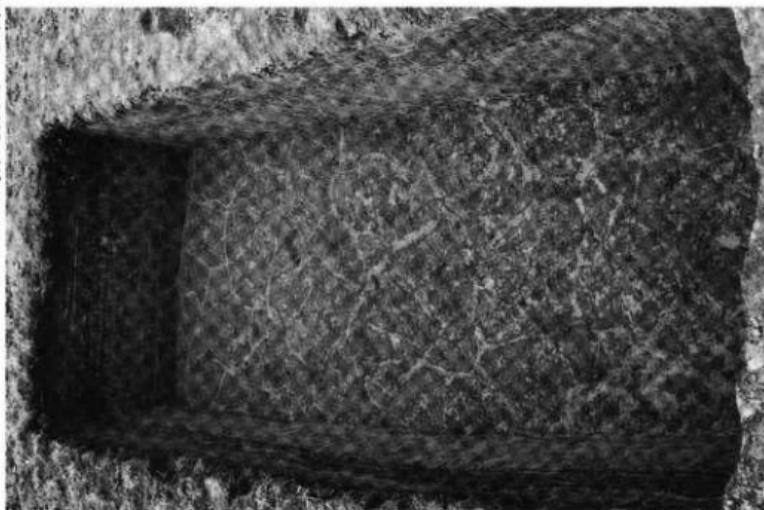


T2 (南東から)▶

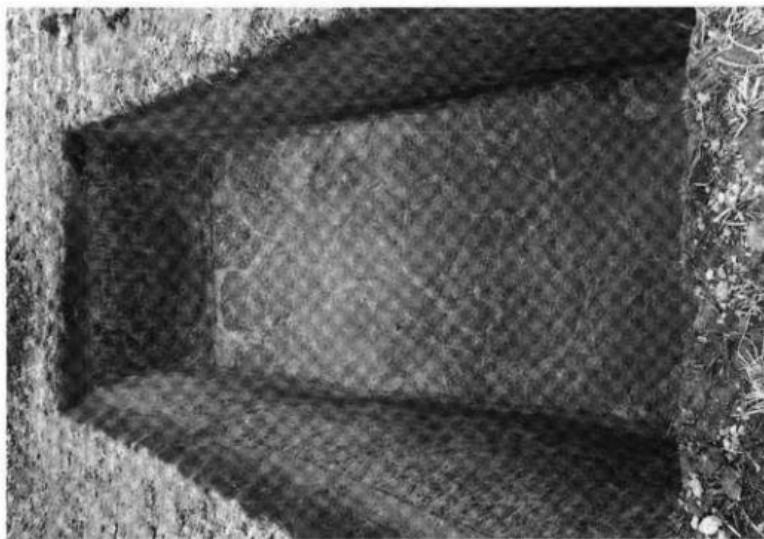


T2 北壁断面(南東から)

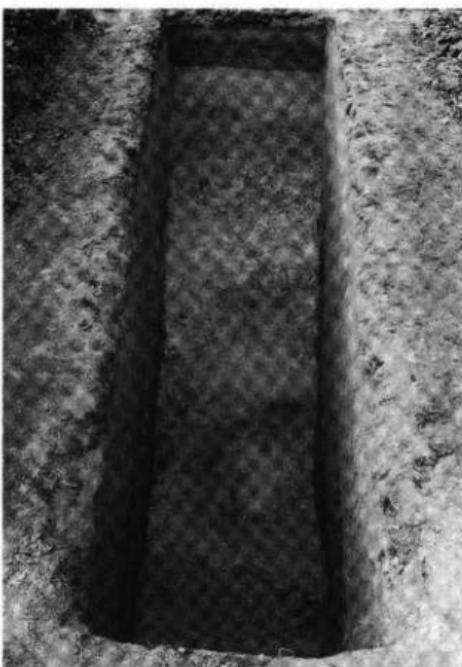
図版一〇 吉志部遺跡 T3・T4



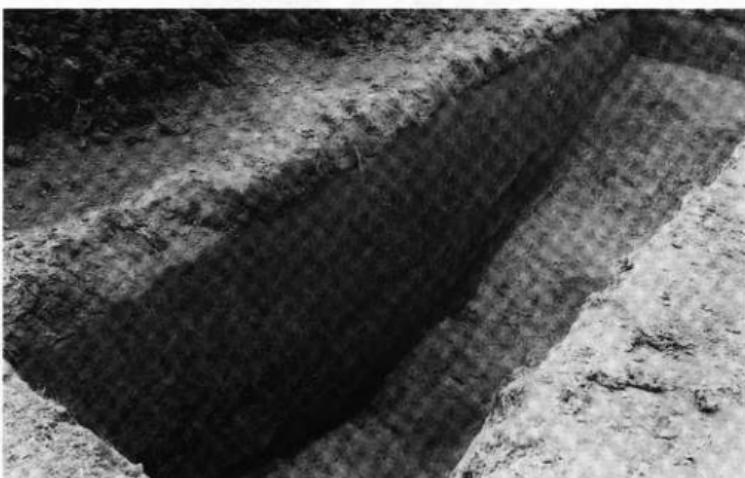
T3 (南東から)



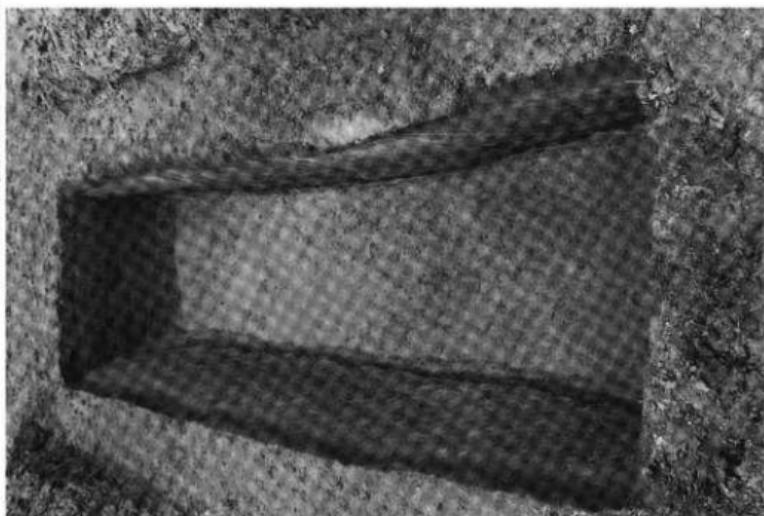
T4 (南東から)



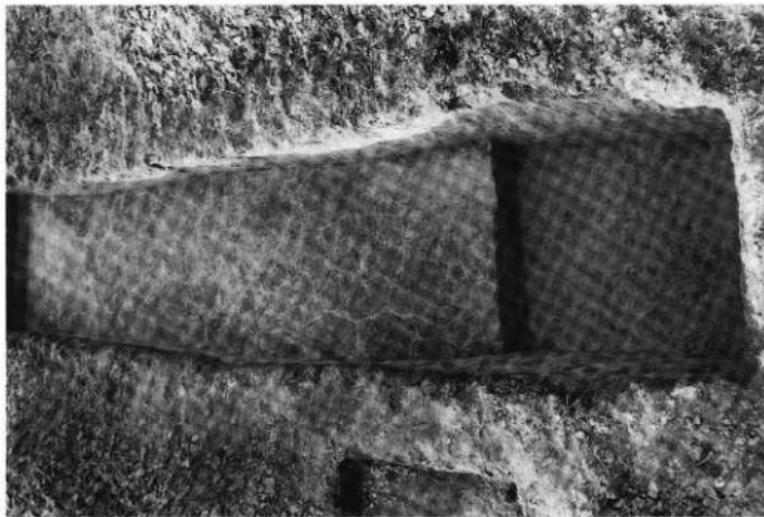
T5 (南東から)▶



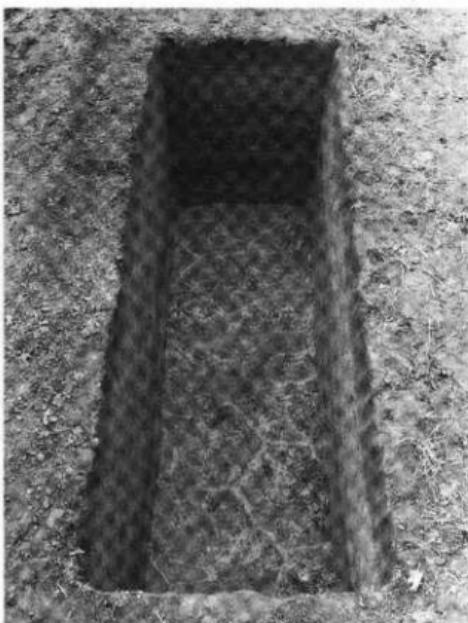
T5 西壁上層断面(東から)



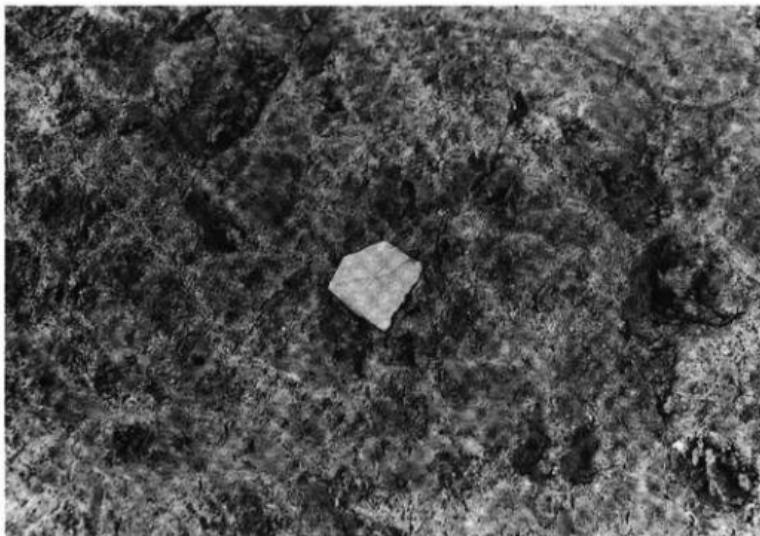
T6 (南東から)



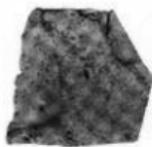
T7 (南東から)



図版一四 吉志部遺跡出土石器



T2 石器出土状況(南西から)



1

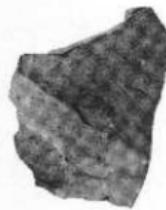


2

出土石器



3



[平成2年度]

埋蔵文化財緊急発掘調査概報

垂水遺跡  
吉志部遺跡

平成3年3月30日

編集 吹田市泉町1丁目3番40号  
発行 吹田市教育委員会